～ 昔の遊び ～

5 江戸の子供遊び

鎌田 道隆
KAMADA Michitaka
奈良大学文学部史学科教授/文学博士

平和が続き町人文化が花開いた江戸時代。流行した浮世絵には子供の姿が描かれたものも多い。「母子絵」や「遊び絵」、当時の風俗随筆、さらには復元した江戸時代の「からくり玩具」から見える、昔の子供たちの遊びとは…。

子供は可愛らしいもの

いつの時代も、子供たちは遊びの天才です。かつて、遊びは子供たちの仕事と言ってもよい位でしたし、無心に夢中で遊びまわるのが子供でした。大人たちも、遊ぶ子供の魅力を発見し、子供の可愛らしさを認め、遊ぶ子供たちの姿に癒されてきたのでした。

平安時代末期の『梁塵秘抄』という書物に、「遊びをせんとや生まれけむ、戯れせんとや生まれけん、遊ぶ子供の声聞けば、我が身さへこそ動がるれ」とありますが、大人が子供たちからたくさんの喜びをもらってきた人類の歴史を、みごとに表現した言葉だと思います。千年以上の昔から今日まで、また洋の東西を問わず、子供たちの遊ぶ光景やしぐさから、子供とは可愛らしいもの、あどけないものと、大人たちは認めてきたようです。

江戸時代には、子供を中心とする「母子絵」や「遊び絵」が数多く描かれましたが、今私たちは「公文浮世絵コレクション」によって、実にあどけない子供たちの姿を確認することができます。母親に甘える子、仲間同士でふざけ合っている子、年中行事や四季の祭りに参加し戯れる子供たち、川遊びや雪遊びに熱中する子供たちなど、さまざまな場面を絵師たちは描いています。絵師たちが、子供たちをいかにしっかりと観察し、あたたかな目線をそそいでいたかが、描かれた子供たちの絵から伝わってきます。

描かれた子供たちは、どの子もとても可愛らしい容姿をしています。痩せこけたり、汚れたり、みすぼらしい風采をした子供などはいないのです。絵師たちは、子供を描く約束事のように、ぽっちゃりとして愛らしい子供描写に仕上げているのです。こうした子供絵の描写の背景には、一般の大人たちの子供観というか、子供とは可愛らしいものという期待感が、強く影響しているように思います。

図1　子ども獅子舞（©公文教育研究会）

図2　風流をさなあそび（©公文教育研究会）

図3　すな鳥（漁り）子供遊（©公文教育研究会）

図4　子をとろ子をとろ遊び（『守貞謾稿』）

図5　まわりのまわりの小仏なんで背が低い（『守貞謾稿』）

18世紀は子供文化の時代

日本の中世が武士たちを主役とする戦争の時代であったのに対し、近世すなわち江戸時代は戦争のない平和な時代となり、めざましい経済発展に裏付けられた庶民の生活文化が、飛躍的に向上しました。とりわけ都市の発達と町人文化の伸長が特筆されます。17世紀の終わりの元禄年間以降は、1日3度の食事をし、外食をも楽しむ食生活、住宅には畳敷が普及し、浮世草子を読み、浮世絵を買って鑑賞し、芝居を見たり、旅に出かけたり、社寺へ参詣したり、子供たちには寺子屋などでの教育が必要で、おもちゃによる知的情操も大切だと認知される社会になっていったのです。

江戸の庶民たちは一生懸命に働いて財産を貯え、生きる喜びとして余暇や老後を楽しみ、子供たちの健康や行く末の安泰を願うライフスタイルをつくりあげたのです。安定的な都市生活のなかで、地域社会や家制度の継承者・跡継として子供たちが大事にされ、「子宝」の意識が培われていったこともありますが、子供への素朴な愛情が醸成される環境が18世紀には成立したのではないかと思います。子供たちを思い切り遊ばせてやれる経済力や環境が整えられ、遊びの名人である子供たちが無心に遊ぶ姿を想像する喜びが、大人たちの生き甲斐となったと思います。それが18世紀の都市社会だったのではないでしょうか。大人たちのこうした子供観の形成のなかで、大人と子供が一緒になってつくりあげた子供文化は、私たちに大切なことを伝えようとしているように思います。

子供たちの仲間遊び

古い時代から、遊び名人の子供たちは立派な遊び道具がなくても、手近な草花や自分の手足を「道具」にして、いろいろな遊びをあみだしてきました。花の首飾りや草笛を吹いて遊んだり、口遊び、指遊び、手遊びなども、昔々からの伝統的な遊びでした。しかし何よりの遊び道具は、実は親しい遊び仲間だったようです。江戸時代の子供たちも、この仲間遊びに夢中になっていたことが伝えられています。

江戸時代末期の『守貞謾稿』には、「鬼ごっこ」や「かくれんぼ」が全国的な遊びであったとあります。京都・大坂では「きっきりもう」、江戸では「鬼ごこ」または「鬼わたし」と呼ばれた鬼ごっこ遊びですが、京坂の「きっきりもう」はキリキリ舞するという意味だったようです。鬼になった一人の子が路上に立ち、その他の子供たちは左右の軒下に分かれ、軒下から他方の軒下へ走り移りながら、鬼に捕まったら次々に交替しました。京坂では一方の子供たちが「向いのばばさん、茶飲みにごんせ」と言い、他方の子供たちが「鬼が恐おうてよう参じません」と応じる。すると「そんなら鉄砲かたげて、ヨッサッサ」と言いながら走り移ったようです。江戸では左右の子供たちがお互いに「向うのおばさんちょとおいで」と声

をかけ、「鬼が恐くてゆかれません」の返事をし、そして「そんなら迎えに参りましょう」と言いながら一斉に駆け出して遊んだということです。

かくれんぼも全国的な仲間遊びですが、『守貞謾稿』には江戸・京都・大坂の三都では「かくれんぼ」、出雲では「かくれんごと」、相模では「かくれかんじょう」、仙台では「かくれかがし」というとあります。また目隠し遊びは、「目んない千鳥」とか「目隠し」とも呼ばれ、目隠しをした子供を中央に置き、他の子供たちが輪になったり、周辺に散らばって、手を打ったり、「目んない千鳥、手の鳴る方へ」と歌って、目隠しの子を誘って遊んでいたようですが、地域によって、子供たちは遊び方やルールも工夫していました。

芋虫ころころは、子供たちが身体を寄せ合い、前の子供の帯をつかんで一列に連なりながらにじり歩く遊びですが、江戸では「芋虫ころころひょうたんポックリコ」と歌い、京坂では「晩の芋虫尾はちんがらちんがらよ」と歌ったと言います。口ずさみの違いなどから、地域による遊び方の相違も想像されます。

女の子たちが横に手をつないで遊ぶ「さあのや」とか「おんごく」という遊びは、『守貞謾稿』によると、小さい子が前列に大きな子は後列になって遊んだというのですが、大坂はどの街も狭く、横に広がらず、小さい子を先頭にして前の子の帯を握って縦長の行列となって遊んだようです。子供たちが環境に合わせて、遊び方を工夫していたことがうかがえます。

人間的な知恵とやさしさ

子供の遊び文化をつくりあげたのは、確かに子供たち自身の創意工夫ですが、大人たちの子供を見る目線や大人たちの遊び心も、江戸時代の子供文化には深く刻みこまれているように思います。大人たちが遊びを発明し、子供たちとともに遊びを楽しんでいたのだと思います。

おもちゃ絵または遊び絵と呼ばれる絵画が江戸時代中期以降に流行します。浮世絵の画法を遊びの世界に取り入れたものですが、この遊び絵には、人間の発想力の豊かさや人間観察力の奥深さが見えます。

たとえば、上下絵とか逆さ絵と呼ばれるものは、上から見ても下から見ても人物の顔に見えるという不思議な絵ですが、これは人が顔らしきものを見る時、何かを目や口や鼻などに見立てようとする意識をうまく利用したものです。一頭多体図や五頭十体図なども、人間の目の錯覚を利用して、一つの頭を二人の身体が共有するように描いています。絵師たちの巧みな表現力、構想のすばらしさに拍手を送りたくなります。人間のしぐさや格好を組み合わせてひら仮名の文字に仕立てた「いろは」の文字絵や、裸体や浴衣姿の人物を集めて顔などに見せる寄せ絵など、奇抜なアイデアと江戸時代人の豊かな遊び心に感心させられます。

遊び心や奇抜な発想は、人体と小道具を組み合わせて動植物などに見せる影絵（身振り絵）のさまざまな工夫や、世の中の情報とか当代の教養を持ち合わせないと理解しづらい判じ絵など、創作性の高さへとつながる面も見えます。またあらかじめ歪んで描かれた絵を、刀の鞘や円筒状の鏡に写して正形を得る鞘絵や鏡中図は、18世紀のヨーロッパで流行したものと言いますが、同じ時期に日本でも取り入れられ遊ばれています。異国の文化を理解し取り入れて、日本風に楽しむ能力や技量を、江戸時代の人々が持っていたことも注目したいものです。

これらの江戸遊び絵は、いずれも大人が充分に楽しめるものですし、実際に座敷遊び、宴会遊びでも活用されたと考えられますが、大人たちが楽しめる本物の遊び絵こそ、子供たちの遊びの世界にも受け入れられたのではないかと思います。

図6　貝まわし図（『絵本家賀御伽』）

図7　鞘絵の遊び方（奈良大学鎌田研究室）

図8　都鳥売り（『絵本家賀御伽』）

図9　戯童十二気候 七月（©公文教育研究会）

写真1　復元した飛人形（奈良大学鎌田研究室）

大人と子供の共有世界「おもちゃ」

江戸時代後期の『絵本家賀御伽』という本に、「都鳥」売りの場面が描かれています。往来をゆくおじいさんが、右手に一本の棒を持ち、棒の先から紐が出ており、その紐の先には素朴なつくりの小鳥が結ばれていて、小鳥を振り廻しながら売り歩いています。このおじいさんの回りには、おもちゃを見上げてワイワイ騒ぐ子供たちの姿もあります。この都鳥は尾がクルクルまわる仕かけになっていて、尾が回ることで音が鳴り、飛行も安定します。羽根の形や彩色を変えることで「紙つばめ」とも呼ばれます。おそらくおじいさんは手づくりの都鳥おもちゃをつくりためて、街頭で売り歩いたのでしょう。

また『絵本家賀御伽』には「手車」売りも描かれています。天秤棒の両方の大きな箱一杯に手車（現在のヨーヨー）が入れてあり、売り主はわらじを履いているので、遠くからやってきて、見本の手車を上手に操りながら売る手車職人なのでしょう。ここにも子供たちが集まってきて、買い求めた子供でしょうか、手車で遊び始めている姿もあります。

江戸時代には、子供のためのおもちゃが内職でつくられ、街頭や縁日などで売られていました。飾って眺めるよりも、動くおもちゃ、動かして楽しむおもちゃが登場してくるのが、江戸時代の特色です。動かすおもちゃには、素朴なものから高度なものまで差違はありますが、何らかの仕かけ、からくりがあります。子供だけの能力や技術では、なかなか完成させることが難しいレベルのものです。大人がつくって子供に提供するか、大人と子供が一緒になってつくるか、大人が少し指導・助言するか、いずれにしても大人の援助が必要です。

江戸時代に流行しながら、今は廃絶してしまったからくり玩具を復元して25年になりますが、復元してみていろいろな発見をしました。たとえば、飛んだりはねたり、飛人形、はね虫、亀山のちょんべなど多くの呼び名をもつ玩具を紹介しましょう。乾燥した割竹片の中央に紐を数回巻き、凸部の上に張り子でつくった蛙やうさぎなどの人形を接着します。下面の凹部では紐に挟み込んだ木片を数回ひねってバネとします。このバネの木片を松ヤニなどの接着物で本体の尾部に強く圧着して台上に放置すると、少しの間を置いて突如割竹と人形が飛びあがって着地します。紐のねじりで出来たバネが、松ヤニの粘着力に勝って台をたたくので、自動的に飛びあがるのです。

このような仕かけを考案した昔の人の知恵やアイデアには驚かされますが、とりわけ自然素材の特長を知り尽くしていることに感動します。木や竹、紙、土、紐（糸）などの自然素材の特長を活用しながら、それらを組み合わせていくことで、すばらしいアイデア玩具をつくりあげています。また不成型・不均質・個性的な自然素材を使いこなしていくには、やさしさの知恵と技術が必要であることも、玩具の復元作業のなかで発見しました。またこうした知恵や技術のなかに、子供たちへの深い愛情がこめられていたことにも気づかされました。時間を惜しまず、手間をかけて工作していくことが、子供たちへの一番の愛情であるということも実感したところです。

現代の子供たちも、復元した江戸時代のおもちゃで遊ぶ時、目を輝かせ、興味津々、あきることなく、おもちゃの魅力を楽しんでいます。江戸時代の大人たちも、遊ぶ子供の姿から、たくさんの癒しと満足を得ていたのではないでしょうか。「とかく、子供たちゃ、いたいけがよいものじゃ」（『守貞謾稿』）と言いながら。